

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

小川 喬 義

表題の「久留米藩飛脚」は明治二年巳八月の「継馬帳」に久留米藩飛脚小川源右衛門とあるところから取ったもので、藩庁として正式にどのように称したかは不明である。なお、明治元年辰十二月の「人馬帳」には筑後飛脚とある。また、宿役人、商人等がどう呼んでいたかは、巳九月三日尾州宮駅浜御用達大森仙右衛門が出した船賃錢受取覚に「久留米様御飛脚様」とあるので想像がつく。

一 道中勘定帳

道中勘定帳は今日の出張会計報告書に当るもので、飛脚

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

便毎に、藩からの大拂金、御状箱賃錢の受取（収入）と、それからの支払、荷造、道中の笠、蠟燭、松明の費用、馬方、人足の賃錢、酒代、継人馬賃錢、旅籠代、茶代等を記し、収支計算して過不足を道中勘定方へ提出し、検査を受けるものである。従って右の支出のそれぞれについて受取証が必要であり、それを基として勘定帳を作成することになる。それ故、飛脚の仕事は、単に書状、荷物を輸送することのみでなく、人足の差配、宿（継所）役人との交渉、会計記帳までをふくむものであり、今日の郵政省と国鉄の仕事と一緒にしたようなものであって、これらの仕事を便により一名から四名で行なうのである。その詳細は以下に紹介

する已（明治二年）十二月八日東京御屋敷より大阪御屋敷を経て、黒崎浜までの勘定帳（資料一の1）で明らかである。資料は半紙二つ折右綴じで、表紙は失われて残っていない。また訂正箇所が多く草稿であろうと推察されるが、他の勘定帳が断片的なのに比べて、比較的まとまっているので掲載することにした。

（資料一の1）

已十二月八日東京出立

一三拾五両

東京ニ而大拂

金受取

一八両貳歩三朱ト

御状箱賃錢受取

四百八文

ノ

四拾三両貳歩

三朱ト四百八文

右之内方仕拂

一六百文

先觸賃錢

一壹歩三朱

七嶋三枚代

一貳朱

一壹歩貳朱

一五百文

一貳朱ト四百文

壹枚ニ付貳朱ト貳百文

細引壹筋代

繩壹方代

東京御屋敷

出立造用

馬方暮七ツ時呼

出シ之處夜明相成ニ付

支度代遣ス

同人共え祝儀酒代

引廻し桐油貳枚

油引張代

道中入用冠笠

壹代

御状箱受取町便

等ニ丁人壹人相雇

賃錢

東京御屋敷方

附出シ馬貳疋

賃錢

一貳朱

品川定宿茶代

一貳朱

舞坂定宿茶

一貳朱

遣ス

同所馬刺源八え

一壹ノ貳百四拾

同所船越賃錢

遣ス (注二)

八文

一百廿八文

改木札代

一百文

同所船頭え祝儀

一貳朱

小田原本陣久保

酒代遣ス

一六百文

田氏え茶代遣ス

一壹歩

新居定宿茶代

一壹朱

箱根越雨天ニ付

一壹歩

宮定宿茶代

馬士え酒代遣ス

一百文

同所附込祝儀

一百廿八文

箱根定宿茶

一壹歩

馬士ニ遣ス

一壹歩

駿府改木札代

一四百文

桑名定宿茶

一貳ノ四百六文

同所定宿茶代

一貳百文

代

安部川越賃錢

一壹百文

同所船場方宿

川札拾四枚壹枚百六

拾九文宛

迄運賃錢

一六ノ四百六十六文

大井越立賃錢川

一六百文

船頭え祝儀酒代

札二十二枚壹枚貳百

一貳朱

坂ノ下方土山迄夜

九拾文づつ

遣ス

道ニ付馬方え酒代

茶代

一百文

同所改木札代

一貳歩貳朱

取候節運賃錢
大坂定宿茶代

一壹朱

大津定宿

一壹ノ六百元

同所逗留中

茶代

一貳百文

伏見附込祝儀

一五兩貳歩貳朱

小遣イ錢日数
四日兩人分

酒代

一壹歩貳朱

同所定宿茶

東海道九泊壹
人壹歩壹朱つつ

代

一貳朱

淀船并当代

一貳兩貳歩

兩人分旅籠代
同昼遣イ日数十
日分壹人一日ニ付

兩人分

一八ノ八百六拾文

淀船賃錢

貳朱つつ兩人分

一貳百文

蒲團貳枚代兩

一百六拾八貫

人分

五拾文

東海道本馬貳

一貳ノ三百文

川上人足手

足輕尻壹疋賃

傳賃錢

錢

一三ノ貳百文

所々ニ而蠟燭求メ

一貳朱

船中入用炭

代壹挺ニ付百文当

割合兩人分

一三朱

大坂御屋敷御

一壹ノ六百元

船中昼小遣イ

狀箱御荷物納受

錢兩人分

日数八日

一壺ノ貳百文

船中船宿茶

代割合両人分

一貳両壺ノ六百文

船中旅籠代

日数八日一日老人貳

朱ト百文両人分

一貳朱

船頭え祝儀酒

代遣ス

一貳歩貳朱

蒲団貳枚代

金ノ

拾七両三朱

錢ノ

貳百三貫六百九十四文

(注一) 馬刺、うまさし、宿駅で人馬の役を指図した宿役人

(「広辞苑」)

以上で終っていて、東海道が九泊十日、大坂より黒崎浜までが船旅八日を要していることがわかる。しかし、黒崎浜より久留米迄の分が脱落しているので、次に午(明治三年)二月の勘定帳の断片(資料一の2)を紹介する。

(資料一の2)

右之内々

黒崎路支拂

一壺ノ貳百文

黒崎浜揚賃

錢

一貳歩

同所定宿茶代

一三百文

同所附出し祝儀

酒代

一貳拾五ノ五百

黒崎々御国迄

四文

馬三疋賃錢

一壺両

三日路二泊旅籠

代両人分

一五百五十文

先觸賃錢

一三歩

同昼遣イ日数

三日両人分

一六百文

三日路蠟燭代

一三百文

附込馬方え祝儀

酒代

一八百文

墨紙筆代

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

金ノ貳両壹歩

錢ノ貳拾九ノ貳百五拾四文

九ノ金直シ

三両壹歩ト四文

二口ノ五兩二歩ト四文

差引残而

三朱ト百七拾八文不足

午二月出ス

山下勇治

小川源右衛門

ノ

黒崎浜に上陸して、木屋瀬―飯塚―内野―山家―松崎―久留米の所謂松崎街道を二泊三日要し、それ故「三日路」と当時称したことがわかる。但し、この道順や、旅行速度は勘定帳から全て知ることとはできない。これらは、次に紹介する「継人馬帳」によって詳細に知ることが出来る。

ともあれ、道中勘定帳は先に述べたように飛脚旅行の会計報告書であって、現在手許にあるものは、右に紹介した

ものの外

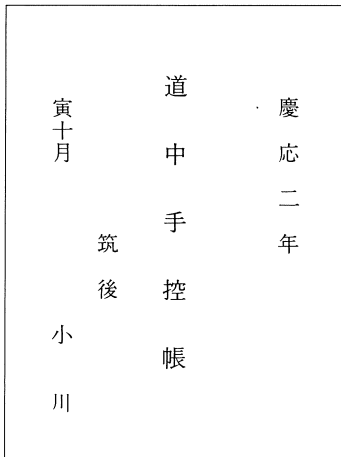
(資料一の3) 寅(慶応二年)十月(断片)

同年七月廿七日より八月廿四日迄、江戸逗留、同月同日江戸出立のもの。

表紙が残っている。体裁は、半紙横二ツ折、さらに縦二ツ折右綴じ。

表紙

19.5cm



13cm

(資料一の4) 卯(慶応三年)七月八日江戸出立のもの。

(一枚のみ。縦十五・八センチ、長さ三十三センチ、但し終りの部分切損)

(資料一の5) 卯(慶応三年)十月廿一日東京出立、大

井川越までのもの。体裁半紙二ツ折、右綴じ。

(資料一の6) 辰(明治元年)十月三日久留米出立、京

都迄のもの。体裁右に同じ。

(資料一の7) 巳(明治二年)大坂発(月日不明)八月

廿四日東京にて勘定相済のもの。体裁右に同じ。

(資料一の8) 巳(明治二年)八月廿四日東京出立、大

坂逗留の後、久留米迄。一部破損、体裁右に同じ。

(資料一の9) 巳(明治二年)十二月八日東京出立、久

留米迄(一部破損)体裁右に同じ。

(資料一の10) 年不明、十二月廿二日久留米出立、京都

逗留の後、正月廿九日東京着のもの。体裁右に同じ。

(資料一の11) 年月不明、東京より久留米迄。体裁右に

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

同じ。

(資料一の12) 年月日不明(桑名乗船は九月七日)大坂

より江戸までのものの断片。体裁は半紙横二ツ折り、さらに縦二ツ折右綴じ。

などがある。

表題の道中勘定帳という用語は、表紙下半分の断片(資料一の13)があつて、「勘定帳」と読めること、および「御道中御勘定方」より小川源右衛門えの公用状に「勘定帳云々」の言葉が見えることから使用した。

道中勘定帳の記載の仕方は、右の各資料すべて同一形式で、紹介例は代表的なものとみてよい。

最後に、勘定方へ提出するものは、収支過不足を記入した後末尾に次のように記載したものと想はれる。以下に紹介する断片(資料一の14)は、右に列挙した資料以外のものである。

(資料一の14)

一、百文

藤川宿にて

四挺（蠟燭―筆者注）代

右同断

一百四拾八文

御油宿ニテ六挺

相求右同断

惣

五拾四貫貳百拾八文

入用高

差引

拾五ノ八百拾八文

不足

此金貳兩壹歩三朱ト

貳百拾八文

右之通勘定相立如是

御座候已上

九月 森崎茂作

小川源右衛門

提出した勘定帳は、勘定方において吟味したらしく、先に述べた御道中御勘定方からの呼出し状は、勘定帳の計算

違いを指摘し、計算のやり直しを命じている。先の資料中同年同月の重複したものは、おそらくこの計算直しの草稿に当るものであろう。御道中御勘定方からの公用状（資料一の15年不明）を紹介する。

（資料一の15）

小川源右衛門様

御道中

御勘定方

（氏名破損）

勘定帳少々算違ひ御座候ニ付

付紙状差遣申候間尚御算

当之上御仕直シ可被成候且又

御家中取建立之義ニ付御面

談申度義御座候間乍御苦勞

明廿七日勘定帳持参被下

度尤九ツ時頃御使者屋へ御出

可被下候此段申上度早々

已上

四月廿三日

二、継人馬帳

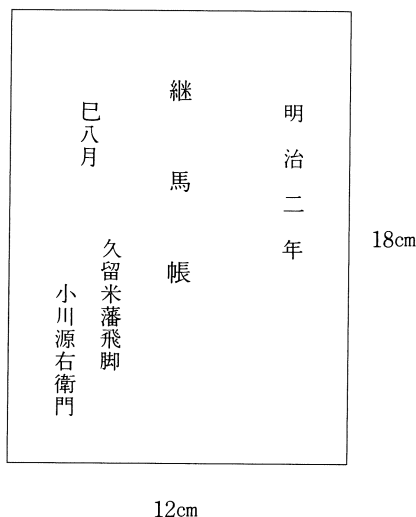
「継人馬帳」、「継馬帳」は、宿々（継所）問屋場にて本馬（目方四十貫まで）、軽尻（人が乗るもので、五貫目までの荷物をつけるが、その上に蒲団中敷など二、三貫目までは認められていた。人が乗らなくても二十貫目までを軽尻とした）、人足を継立てた場合の使用人馬の種類と数、使用区間、賃金を問屋（継所、伝馬所）役人に受取証として記入させたものである。従って年月日、旅行道順、荷物重量、旅行速度等が詳細にわかるのである。もっとも、陸上運送についてのみであって、水上運送については前の勘定帳から見当をつけるしか方法はない。継人馬帳の代表例として、明治二年巳八月（資料二の1）のものを紹介する。これは半紙横二ツ折、縦二ツ折、右綴ジ、表紙、綴ジ紐付きで、中一枚が破れているだけで、ほとんど旧態を残している。内容は八月朔日桑名から始って、八月二日京都着、とんぼ返りで大坂を八月七日に立、八月十四日には東京

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

へ着いている。特に上りが僅か七日しかかかっていないし、軽尻利用であるから、早打ちであったかも知れない。（通常は馬二疋とか、場合によっては長持忼棹などもある）

（資料二の1）

表紙



旅程、旅行速度をみると、

八月一日 桑名―四日市―石薬師―庄野―

(十里八丁) 龜山―関(軽尻沓疋)

八月二日 関―坂下―土山―水口―石部―

(十九里十二丁) 草津―大津―伏見(軽尻沓疋)

十九里十二丁

八月七日 大阪―守口―枚方―淀(守口―

(八里十二丁) 枚方間軽尻二疋、枚方―淀間人

足四人)

八月八日 淀―伏見―大津―草津―石部―

(十九里十二丁) 水口―京都―土山(淀―伏見間

人足四人、その後は軽尻二疋、

土山以後一丁欠)

八月九日(欠)

八月十日より 出発地不明石薬師―四日市―桑

八月十一日 名―熱田―鳴海―池立^{ちりふ}―岡崎―

(石薬師より日坂まで) 藤川―赤坂―御油―吉田―二川

四十六里三十三丁一日 ―白須賀―新居―舞坂―浜松―

平均約二十四里) 見付―袋井―掛川―日坂

八月十二日 日坂―金谷―大井川―藤枝―岡

(廿五里) 部―丸子―府中―江尻―奥津―

由比―藤原―吉原―原―沼津

八月十三日 沼津―三嶋―小田原―大磯―平

(二十八里二丁) 塚―藤沢―戸塚―程ヶ谷―神奈

川―川崎―品川

八月十四日 品川―東京

驚くべき速度であるが、駿府御改所の荷物改によれば乗軽

尻二疋、一疋蓆包式箇僅か八貫目の荷物であるから、この

速度が可能であったのであろう。また京―大坂間は通常は

淀船を利用するところであるが、陸路をとっており、枚方

―淀間は前年洪水のため、馬がなく、人足にて継立てると、

伝馬所が断っている。舟便を利用しなかったのもこの洪水

と関係があるかも知れない。

次に、本馬継立の場合をみてみよう。卯(慶応三年)三

月廿五日江戸出発二川迄の継馬帳(資料二―2)である。

この時は駄荷本馬沓疋四十貫目、同沓疋三拾七貫目、荷軽

尻沓疋式拾沓貫目(卯三月廿五日品川御改所の調べ)計馬

三疋の旅行である。旅程、速度をみると

三月廿五日

二十里九丁

三月廿六日

十八里六丁

三月廿七日

十四里半六丁

三月廿八日

十四里半三丁

三月廿九日

十三里八丁

江戸―品川―川崎―神奈川―程

ヶ谷―戸塚―藤沢―平塚―大磯

大磯―小田原―箱根―三嶋―沼

津―原

原―吉原―蒲原―田比―奥津―

江尻―府中―丸子

丸子―岡部―藤枝―島田―大井

川―日坂―掛川―袋井

袋井―見付―浜松―舞坂―新居

―白須賀―二川

以下欠

右のように重量荷の本馬継立の場合は、かなり速度が落ちる。一日平均十五・六里で、熱田―桑名間の海上船旅、鈴鹿越を考慮に入れると二川―京都間五十三里一丁を残すとはいえず、資料一の1の勘定帳記載のとおり東海道九泊り十日を要したのであろう。(東海道里程は藤枝宿春木屋発行の里程早見表によった。)

次に黒崎より久留米までについては、年不明二月廿六日

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

黒崎発廿七日久留米着の資料(資料二の3)がある。この際は、本馬三疋、軽尻二疋である。

二月廿六日

黒崎―木屋瀬―飯塚

八里

二月廿七日

飯塚―内野―山家―松崎―宮ノ

十二里

地―久留米

とあって、黒崎―久留米間二日の旅程である。また別の年不明久留米より黒崎の上り旅で、馬三疋の場合、出発日の夕には黒崎に着いている。黒崎路を「三日路」と言うのは、歩行を基準として言ったものであろう。

継人馬帳資料は右に上げたものの外に、

(資料二の4) 年不明九月十日江戸発奥津迄のもの。体

裁半紙横二ツ折、縦二ツ折右綴ジ。一部

破損。

(資料二の5) 子(元治元年) 九月二日白須賀より九月

五日枚方まで。表紙付。体裁半紙横二ツ

折、縦二ツ折右綴ジ。

(資料二の6) 年不明九月六日伏見癸九月十二日品川迄。

体裁右に同じ。表紙なし。

(資料二の7) 巳(明治二年) 正月十八日草津より正月

廿七日程ヶ谷までのもの、表紙なし。

(資料二の8) 年不明十二月、久留米より黒崎までのも

の。

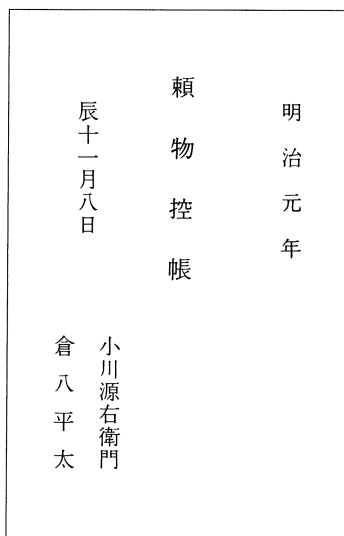
その他断片がある。また表紙資料は、右の資料二の5の表紙「元治元年 子九月 下り 継馬帳 筑後 森崎茂作、小川源右衛門」の外に、「慶応四年 辰二月 継人馬帳 筑後飛脚小川源右衛門、倉八平太」(資料二の9)、「明治元年 辰十二月 人馬帳 筑後飛脚小川源右衛門」(資料二の10、久留米より山家まで、以下欠)がある。表紙記載の体裁は冒頭に掲げた明治二年のものと同じである。

勘定帳と総合して年代をみると、元治元年から明治三年まで七年にわたり、幕末から明治初期の大動乱期に、文字通り東奔西走して、久留米藩江戸屋敷、京都屋敷、大坂屋敷および国元間の公私の情報伝達に精勤している。

三、御預り御状箱御荷物控とそれらの受取証

輸送を委託された書状や金子、荷物を控えたもので、表紙は一つだけ残っている。

34cm



12cm

内容は、輸送物の外装(紙包、油紙包、書状、金子入書状など)、掛目、運賃、受取人、差出人を記載したものである。帳面の体裁は、右表紙のとおり半紙横二ツ折、右綴ジである。残存している資料はすべて一丁つつの断片で、

年月日が分らないため、編集も不可能である。従って以下には、戸田乾吉「久留米小史」（複刷）附録「文久二年久留米藩分限帳」、「江戸定居藩士分限帳」、「明治二年久留米藩御記録分限帳」および「加藤田日記」（久留米郷土研究会編集発行）によって記載された人物の比定を行った。先ず、江戸（東京）その他から国元えの分を上げる。

（資料三の1）表

中津

一紙包 二ツ

目方八十匁

賃銭 百六十文

秋山寛太様 中尾勘蔵

／＼

一右同 二ツ

目方百十匁

賃銭二百廿文

柳謙蔵様 右同人

（注一）

／＼二口／＼三百八十文

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

内五分札あり

／＼

一紙包 壹ツ

目方式十目

賃銭三十拾文

生島曾兵衛殿え

知半（ママ）

和合左衛門方

／＼

（注一）柳謙蔵、「加藤田日記」七十一頁によれば、元治二年

足輕目付

（資料三の1）裏

一紙包 貳ツ

掛目五十目

賃銭百四文

淡河往来様 淡河小平太

（注二）

（注三）

一紙包 壹

掛目三十拾目

賃 六拾文

武藤弥兵衛様

(注四)

武藤健蔵
(注五)

一油紙包

壹

一紙包

貳

懸目 五百目

賃壹ノ四拾文

小峰権十郎様宿元え

(注六)

同人方

(注二) 淡河往来「加藤田日記」八十四頁(慶応二) 淡河小平

太と共に日新流砲術世話方

(注三) 淡河小平太、二百三十石御馬廻五六番(明治二年久留

米藩士記録分限帳、以下「明二」と略称)

(注四) 武藤弥兵衛、八十石中小性組(文久二年久留米藩士分

限帳、以下「文二」と略称)

(注五) 武藤健蔵、御徒士並十石三人扶持(「明二」)「加藤田

日記」百廿七頁には慶応二年八月江戸勤番より帰着

(注六) 小峰権十郎、二十石三人扶持御使番(「文二」、また

「江戸定居藩士分限帳」(以下「江戸」と略称)によれば、御扨従御奏者番支配(「江戸」二頁)

(資料三の2) 表

一紙包

壹ツ

掛目百八拾目

賃三百三拾文

生田金吾様 清水牧右衛門

(注七)

(注八)

一(破損)

四ツ

ちん五百八拾文

生田金吾様 定生吾勢太方

右同金吾様 生田源太郎

右同元次郎様 同源太郎

(注九)

園川直三郎 同源太郎

(注十)

ノ

一油紙包

壹ツ

掛目貳百拾文

ちん四百廿四文

古賀瀧弥殿 古賀鉦三郎

(注十一) (注十二)

(資料三の2) 裏

一紙包 壺ッ

掛目八十匁

ちん百八拾四文

村上四郎右衛門様 萩野里記

(注十三) (注十四)

(破損) 壺ッ

拾目

ちん六百八拾四文

後藤金六え 田中直右衛門

(注十五)

一書状 壺封

後藤金六へ 広瀬弥一郎

一紙包 壺ッ

掛目百目

ちん貳百八文

松下又吉殿 松下元芳

(注十六)

(注十二) 古賀鉦三郎、十五石三人扶持中小性組(「文二」)、

十五石三人扶持小性組荒巻太左衛門組中奥御勝手役御目付兼(「明二」)中扨従並御徒士組十二石三人扶持(「江戸」五頁)

(注十一) 古賀瀧弥、八十石片山兵左衛門組(「文二」)、十二

石三人扶持御徒士組伴勝三郎組(「明二」)

(注十二) 古賀鉦三郎、十五石三人扶持中小性組(「文二」)、

十五石三人扶持小性組荒巻太左衛門組中奥御勝手役御目付兼(「明二」)中扨従並御徒士組十二石三人扶持(「江戸」五頁)

(注九) 生田元次郎、百五十石竹之間組(「文二」八頁)、二十

石三人扶持竹之間組(「江戸」二頁)、百五十石竹之間

組大小性御番方助(「明二」十四頁)

(注十) 園川直三郎「加藤田日記」九十三頁によれば、慶応二

年ごろ京都詰御守衛勤番、二十人扶持竹之間並(「文

二」同「明二」)

(注十三) 村上四郎右衛門、十五人扶持竹之間組(「文二」)、

「加藤田日記」百三十一頁によれば慶応三年八月今出

川御守衛のため上京)

(注十四) 萩野里記、「加藤田日記」六十一頁によれば、元治

二年七月江戸勤番を仰付られている)

(注十五) 後藤金六、十二石三人扶持御徒士組野崎兵司揚組

(明二二二頁)

(注十六) 松下元芳、御医師(文二「明二」)

(資料の三の3) 表

一 紙包 壱ツ

賃錢六拾四文

西村斎藏へ 西村善次方

(注十七)

一紙包 三ツ

掛目六百四拾四匁

賃錢三ノ三百五拾式文

三谷弥八殿 三谷幾八方

(注十八) (注十九)

一紙包 壱ツ

掛目貳百三十匁

賃錢四百六十文

梶村四郎様 磯部嘉門

(注二十)

(注二十一)

一紙包 壱ツ

賃錢三百文

山口清司様 今村福次方

(注十七) 西村斎藏、「明二」に十石三人扶持京都御用人支配

御徒士並西川斎藏とあるのがこの人物か。草書の村の
くずしは川と似ている。

(注十八) 三谷弥八、十二石三人扶持中小性組(文二)、十

五石三人扶持中小性組片山兵左衛門組(明二)

(注十九) 三谷幾八、八十石中小性組(文二)、十五石三人

扶持中扨從組(江戸)、御蔵米八十石御右筆内事局

補正調役兼(明二)

(注二十) 梶村四郎、三百石渡瀬平太夫組(文二)、三百石

大扨從町奉行副役(明二)

(注二十一) 磯部嘉門、三百石御先手弓鉄炮頭(文二)

(資料の三の3) 裏

一紙包 壱ツ

賃錢四拾八文

竹野屋次兵衛 高橋傳三郎

一紙包 貳ツ

掛目百五拾目

賃錢三百拾文

水島傳三郎殿 水島兎毛

(注二十一)

一紙包 (破損) ツ

(破損)

賃錢壹ノ四拾文

平田五郎治宿元え

京都

一紙包

壹ツ

ちん百文

津留崎庄藏 清水忠平

(注二十一) 水島兎毛、三百石竹之間組 (明二)

(資料三の4) 表

一書状

貳封

賃貳百文

山田逸馬様 荒巻金次郎

(注二十三)

一紙包

三ツ

掛目壹ノ四百目

賃 貳ノ九百拾六文

(破損) 様 村上政右衛門
(〃) 様

一書状

壹封

賃 九十三文

(破レ) 様 戸田市十郎
(注二十四)

一 (破レ) 包

壹ツ

四拾貳文

(破レ) 右衛門 馬場訓太郎

(注二十三) 山田逸馬、三百石御馬廻三四番大小性御番方助

(明二)

(注二十四) 戸田市十郎、三百石山村源太夫組 (文二)、三

百石御馬廻三四番 (明二) 加藤田日記「六十一頁」に
よれば元治二年七月江戸勤番仰付らる。

(資料三の4) 裏

一紙包 貳ッ

掛目百目

賃錢百八文

米屋常右衛門

察[?]
(字読解不能)

一紙包 壹

掛目百目

賃錢百八文

柴田清左衛門 久留金作

一紙包 貳ッ

掛目貳百拾匁

賃四百廿四文

渡辺熊藏宿元(注二十五)

一金子入書狀 壹封

ちん百文

吉田尉平へ 清水忠平

(注二十五) 渡辺熊藏、百三十石御側弓鉄炮頭(文二)、二十石三人扶持御扨從御奏者番支配(江戸)

(資料三の5) 表

一紙包 貳ッ

掛目百目

賃貳百文

吉田藤次郎殿

吉田万兵衛
(注二十六)

一紙包 壹ッ

賃錢百文

秋丸平八様 [?]川庄吉

一書狀 壹封

賃錢四拾文

阿部種右衛門様 与平次

一書狀 壹封

井上半六 井上房吉

(資料三の5) 裏

大阪

一書状 壱封

賃錢貳拾八文

川野嘉助様 白水丈吉

一紙包 壱ツ

賃錢三拾貳文

田(破レ) 柴(?) 吉宿元え

一紙包 貳ツ

掛目三百廿目

賃六百元拾四文

平木虎次郎殿 平木善兵衛

一書状 壱封

ちん廿四文

森山栄吉宿元え

○

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

(注二六) 吉田万兵衛、十石三人壱歩扶持御徒士並(文

二)、十二石三人扶持下坂五郎兵衛組制度局外事局御用(明二)

(資料三の6) 表

先取

一紙包 壱ツ

目方四百目

賃錢六百元

梅林寺様 大蔵市郎兵衛

御内

先取

一亀包三ツ合壱ツ

目方 貳ツ目

賃錢 壱ツ文

東林寺様 森江惣右衛門

ノ

一紙包 二ツ

賃せん百四十文

生田金吾様 生田記内 (注二十七)

一右同 壺ツ

賃せん式百文

可児㊦喜久殿 可児六郎左衛門 (注二十八)

(資料三の6) 裏

先取

一紙包 四ツ

目方一ㄨ目

賃錢壺ㄨ五百文

村田弥藏行 伏見ㄨ

一七嶋包 壺ツ

目方壺ㄨ五百目

賃

松本成藏行 宮宿ㄨ

(注二十七) 生田記内、四百石御側弓鉄炮頭 (文二二) 「加藤

田日記」七〇頁によれば慶応元年京都に居る。

(注二十八) 可児六郎左衛門、三百石御使番格御軍制役助 (明
二二) 同高御馬廻並不破左門組 (文二二)

(資料三の7) 表

一紙包 三ツ

目方五百六十目

ちん十四匆

小森田加左衛門殿 藤田半之助ㄨ (注二十九)

一紙包 壺

目方五十目

賃壺ㄨ二步五り

高原信太殿 高原莊太夫 (注三十二)

一紙包壺ツ書状共

中野弥三郎宿元え同人 (注三十三)

一紙包一ツ

吉田梅吉 吉田太兵衛 (注三十四)

一紙包壺ツ

佐々木長太郎様佐々木金次郎

一紙包壺ツ

白尾團平様白尾貞五郎

一紙包壺ツ

佐々木長太郎様佐々木金次郎

(資料三の7)裏

一(破レ)包 (破レ)

池田喜八郎様池田種藏

(注三十五) (注三十六)

賃錢百拾貳文

一紙包壺ツ

後藤銀之助様岩橋良吉

右賃錢三百文

紙包壺ツ

飯田土五郎様飯田源兵衛

(注三十七) (注三十八)

一紙包壺ツ

下村十左衛門様下村藤太

(注三十九)

賃錢三百文

一紙包壺ツ

岩橋新兵衛様岩橋文太郎

賃錢四百八拾六文

一紙包壺ツ

藤江伴作様藤江清之進

紙包壺ツ

(注二十九) 小森田加左衛門、荒巻太左衛門組十二石三人老歩

扶持(文二)

(注三十) 藤田半之助、十二石三人扶持御徒士組宗秀次郎組

(明二)

(注三十一) 高原信太、十五石三人老歩扶持土方半左衛門組

(文二)、片山平左衛門組(明二)

(注三十二) 高原莊太夫、十二石三人扶持野崎兵司揚組(明

二)、「加藤田日記」百二十七頁によれば慶応三年八

月江戸勤番より帰着

(注三十三) 中野弥三郎、三百石大小性(文二)、三百石大

屬從(明二)

(注三十四) 吉田梅吉、二百五十石御馬廻五六番(明二)、

加藤田日記」百五十八頁参照

(注三十五) 池田喜八郎、三人扶持中小性並(文二)、御蔵

米八十石小性組白江市次郎揚組 (明二)

(注三十六) 池田種藏、「加藤田日記」三頁によれば安政五年御參勤御供。

(注三十七) 飯田土五郎、十五石三人扶持御奏者番支配 (文

二)、「加藤田日記」八頁によれば安政二年朋姫様江戸御引越御供、中小性組荒卷太左衛門組 (明二)

(注三十八) 飯田源兵衛、十二石三人扶持御徒士組宗秀次郎組 (明二)

(注三十九) 下村十左衛門、三百石二番組与頭 (文二)、「加藤田日記」二百二十四頁によれば慶応三年物頭御軍制

(資料三の8) 表

一状 式通

賃錢百八拾文

田村七郎右衛門様内

(注四十)

上野勘次え 吉村儀七

先取

一箱

壺ツ

掛目

壺貫八百目

三貫七百五拾文

萬屋行

(注四十二)

一箱 三ツ

掛目三ノ百五拾目

賃錢六ノ五百六拾文

竹頭駒吉様 宮坂鈴作

一書状 壺通

賃百文

古賀定八様 古賀千十郎

(資料三の8) 裏

先取

一箱包 四ツ

掛目 賃四貫貳百三十八文

壺ノ百四拾目

三百拾目

三百拾目

貳百六十目

貳貫三拾目

松本盛藏行

富士屋

ノ

先取

一箱

壺ッ

廣瀬屋恒八

藏数屋勘兵衛行

先取

一七嶋包

壺箇り

大島屋

藏数屋勘兵衛行

一紙包

壺

質百文

(注四十) 田村七郎右衛門、五百石御奏者番列(文二)、「加

藤田日記」百二十七頁によれば御旗本黒隊

(注四十一) 萬屋、京都寺町通五条下る所在

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

(資料三の9) 表

一書状

壺封

質錢四拾文

熊古様 萩野駒藏

一油紙包

貳ッ

掛目貳百八十目

質錢五百八拾文

竹頭駒吉 宮坂鈴作

山口伴四郎宮坂鈴作

ノ

貳拾貫

八百四拾四文

一書状

壺封

ちん四拾八文

藤田菊弥 藤田孫一

(注四十二)

一紙包

貳ッ

掛目貳百拾文

質四百三拾文

藤田鉄五郎 上野龍之進

(注四十三)

(資料三の9) 裏

一紙包 売ッ

掛目売 目

賃式 八拾文

和田謙吉 和田順平

一紙包 売ッ

掛目百七拾目

賃三百五拾文

中原敬三 中原梅吉

一油紙包 式ッ

掛目五百目

賃式 四拾文

堀江七五郎 堀江但馬

(注四十四)

一紙包 売ッ

掛目七拾目

賃百四拾文

末次敬藏 末次傳九郎

(注四十二) 藤田孫一、二十人扶持竹之間組 (文二七)、同大

小性番方助 (明二)

(注四十三) 藤田鉄五郎、百石御使番 (文二七)、同竹之間組

(明二)

(注四十四) 堀江但馬、十五人扶持御奏者番列 (文二七)、千

石御奏者番竹之間組御祐筆頭 (明二)

次は国元からの便である。

(資料三の10) 表

於筑後

淺田薫殿 古賀鉦三郎

(注四十五)

戸田丈左衛門殿 本村直五郎

(注四十六)

(注四十七)

於筑後

吉見勘太郎殿 佐久間幾太

(注四十八)

(注四十九)

石田段次殿 田中原左衛門

(注五十) (注五十一)

於筑後

古田廉太郎殿 高瀬新右衛門

(注五十一) (注五十三)

(資料三の10) 裏 白紙

(注四十五) 浅田薫、「加藤田日記」八頁によれば安政二年朋

姫様江戸御引越御供、八十石中小性組(文二)、同

中小性組片山兵左衛門組中奥御勝手役(明二)

(注四十六) 戸田丈左衛門、十五石三人扶持中小性組片山兵左

衛門組中奥御勝手役御廉番(明二)

(注四十七) 本村直五郎、十石三人老歩扶持御徒士頭月番支配

御徒士並(文二)、「加藤田日記」六十一頁によれば

慶応元年七月江戸勤番仰付らる、十二石三人扶持御徒

士組下坂五郎兵衛組(明二)

(注四十八) 吉見勘太郎、二百石御側弓鉄炮頭(文二) 同高

御徒士頭格(明二)、「加藤田日記」百四十三頁(慶

応四年正月)によれば御用人見習格とある。

(注四十九) 佐久間幾太、三百五十石御側弓鉄炮頭(文二)、

同高御用人見習格(明二)

(注五十) 石田段次、百二十石晴雲院様御付役(明二)

(注五十一) 田中原左衛門、二十石三人扶持御徒士組渡瀬兵太

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

夫組(文二)、三百石御馬廻役原古賀町口御番所詰
穀留定番兼帯(明二)

(注五十二) 古田廉太郎、三十石五人扶持御側弓鉄炮頭(文

二)、同高御用人見習格晴雲院様御附役

(注五十三) 高瀬新右衛門、二十石三人扶持御膳番(文二)、

同(明二)

この他に、残欠が四種ある。

四、先 觸 賃 銭

先觸とは、あらかじめ必要な馬、人足を宿々問屋へ通知
しておくものであり、宿問屋では次の宿問屋へ申し送るの
である。

次に先觸の二例を上げる。

(資料四の1)

覚

一馬 式疋

右者今七日伏見出立東
京迄罷越候条其駅々右

人馬無差聞御差出可成候
様頼存候已上

巳八月廿日

宿々問屋

役人衆中

(資料四の2)

覚

一馬 式疋

右者今廿五日未下刻黒崎

○夜道ニ而

出立久留米迄罷越候条

其宿々右人馬無差支

御差出シ可被成候様頼入存候

右先觸如此御座候已上

次に先觸賃錢の受取証を上げる。子(元治元年)九月廿

五日のものである。

(資料四の3)

覚

一御先觸 壹通

但し從飛脚様品川宿問屋場迄
無相異御届申上賃錢百六十四文

百六拾四文

貫目

一御長持 壹棹

式拾八百五十目人足四人七分五厘
但し川崎宿迄通し持出し

錢五貫三百四拾文 日雇人足壹人ニ付 賃錢

惣五貫五百〇八文 壹貫百式拾四文宛御払被下候

右之通慥ニ奉請取候以上

子九月廿五日

尾張屋

卯之助[㊦]

小川源右衛門様

長持運び人足の賃錢計算の方法が面白い。尾張屋卯之助は
藩邸出入の人足業者であらう。

五、駄 賃

継馬賃錢（駄賃）は、継馬帳によって知ることができる。

幕末、明治初年の駄賃の変動を探るため、元治元年（資料二の5）、慶応三年（資料二の2）、明治二年（資料二の1）の三種の継馬帳を比較してみた。

（表中の軽は軽尻、人は人足、本は本馬）

区間（距離）	元治元年	慶応三年	明治二年
伏見―大津（三里）	軽二百二十五文		軽一ノ百十四文
大津―草津（三里半）	軽二百十八文		軽一ノ九十文
草津―石部（二里半七丁）	軽百八十二文		軽九百十六文
石部―水口（三里十二丁）			軽九百四十六文
水口―土山（二里半十二丁）	軽百六十六文		軽八百四十二文
土山―坂下（二里半）	軽二百九十二文		軽一ノ四百七十六文
坂下―関（二里半）	軽百五十文		
関―龜山（二里半）	軽九十文		
龜山―庄野（二里）	軽百二十文		
	人八十八文		
	軽四十六文		
庄野―石薬師（廿七丁）	人三十六文		

石薬師―四日市（二里二十七丁）

四日市―桑名（三里八丁）

熱田―鳴海（二里半）

鳴海―池立（二里三十丁）

池立―岡崎（三里三十丁）

岡崎―藤川（二里半）

藤川―赤坂（二里九丁）

赤坂―御油（十六丁）

御油―吉田（二里半四丁）

吉田―二川（二里半）

輕百六十八文

人百二十七文

輕百九十四文

人百五十文

輕九十文

人百四十文

輕百六十八文

人百二十六文

輕二百三十二文

人百七十二文

輕百六文

人七十八文

輕百四十文

人百六文

輕三十二文

人二十四文

輕百五十四文

人百十八文

輕九十四文

輕六百三十四文

輕九百八十六文

輕四百六十六文

輕八百五十二文

輕壹百六十四文

輕五百三十文

輕七百八文

輕百六十四文

輕七百七十八文

輕四百八十六文

二川―白須賀（一里半十六丁）
 白須賀―新居（一里三十六丁）
 舞坂―浜松（二里三十丁）
 浜松―見付（四里八丁）
 見付―袋井（一里半）
 袋井―掛川（二里十六丁）
 掛川―日坂（二里二十九丁）
 日坂―金谷（一里二十九丁）
 金谷―大井川（一里）
 大井川―藤枝（二里八丁）

人七十二文
 輕百四文
 人六十八文

輕百十七文
 本百七十二文
 輕百廿九文
 本百九十四文
 輕二百六文
 本三百十五文
 輕三百八十文
 本五百八十五文
 輕百十七文
 本百七十七文
 輕百七十九文
 本二百七十八文
 輕百五十七文
 本二百四十二文
 （日坂―大井川）
 輕三百六十九文
 本四百三十六文
 輕三百六十九文

輕四百六十六文
 輕五百二十文
 輕八百二十二文
 輕壹ノ五百三十文
 輕四百六十六文
 輕七百二十二文
 輕五百五十文
 輕九百六十二文
 輕四百文
 輕一ノ二百四十三文

藤枝―岡部（二里二十九丁）

岡部―丸子（二里）

丸子―府中（二里半）

府中―江尻（二里二十七丁）

江尻―奥津（二里三丁）

奥津―由比（二里十二丁）

由比―蒲原（二里十二丁）

蒲原―吉原（二里三十丁）

吉原―原（三里六丁）

本五百六十八文

輕百三十二文

本二百六文

輕二百三十六文

本三百六十二文

輕百三十七文

本二百十三文

輕二百三十文

本三百五文

輕八十文

本百二十二文

輕二百六十二文

本四百十一文

輕七十五文

本百十四文

輕二百四十八文

本三百九十文

輕二百八文

本三百三十七文

輕五百三十文

輕九百四十六文

輕五百五十文

輕八百二文

輕百六十六文

輕一ノ七十文

輕三百十二文

輕一ノ文

輕八百七十二文

原―沼津（一里半）

沼津―三島（一里半）

三島―箱根（三里二十八丁）

箱根―小田原（四里八丁）

小田原―大磯（四里）

大磯―平塚（廿六丁）

平塚―藤沢（三里半）

藤沢―戸塚（一里三十丁）

戸塚―程ヶ谷（二里九丁）

程ヶ谷―神奈川（一里九丁）

神奈川―川崎（二里半）

輕百十四文

本百七十四文

輕百十四文

本百七十四文

輕一ノ八百三十文

輕三百十五文

本四百六十四文

輕五十八文

本八十五文

輕二百六十一文

本四百六文

輕百四十五文

本二百二十三文

輕百七十七文

本二百六十八文

輕八十文

本百二十五文

輕百八十七文

輕四百五十六文

輕四百五十六文

輕五ノ九百七十六文

輕一ノ二百四十八文

輕二百三十八文

輕一ノ五十文

輕六百四文

輕七百十八文

輕三百三十二文

輕七百五十文

川崎—品川（二里半）		本二百八十三文 輕百八十七文	輕七百五十八文
品川—江戸（東京）（日本橋まで二里）		本二百八十三文	輕六百三十四文

明治二年の賃金は、元治元年に比べると約五倍、慶応三年に比べると約四倍に上っている。元治元年と慶応三年の比較可能な区間は白須賀—二川間しかないが、この期間の値上りは極く僅少であって、インフレーションは慶応四年

明治元年からおこったことがうかがはれる。久留米より黒崎までの駄賃については、三つの資料（二の3、二の8、二の9）がある。しかしながら、年がわかるのは二の9だけである。この三資料を比較してみる。

区間	年不明十二月	明治元年十二月	年不明二月
久留米—松崎（三里）	本百八十三文	本八百九十二文	
松崎—山家（三里）	本百九文	輕八百九十三文 （マ）	本八百七十文
山家—内野（三里）	本三百三十九文	本六百八十六文 輕五百十三文	輕七百八十七文 本一、〇五百九十六文 輕一、〇五十七文

内野―飯塚（三里）	本二百十九文	本一〇二十七文
飯塚―木屋瀬（五里）	本三百二十三文	輕六百八十二文
木屋瀬―黒崎（三里）	本百九十七文	輕一〇四百七十七文
		本一〇百一十一文
		輕一〇五十一文

六、川 越 賃 錢

東海道の諸河川の川越は川札購入の形で賃錢を支払う仕組となっている。次の資料（六の1）は、年不明であるが、諸河川の賃錢が記されている。

（資料六の1）

川越賃錢覚

五月廿一日

一〇〇〇五百四拾八文 酒勾川

川札壹枚ニ付六拾貳文

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

貳拾四枚分本馬貳疋

五月廿二日

一 四百文

但川札拾貳枚

木瀬川

壹枚ニ付三拾貳文つゝ

同

一 四百文

但川札拾貳枚

潤井川

壹枚ニ付三拾貳文つゝ

一 百文

富士川

但馬荷貳ニ付手半代

同廿三日

一 壹ノ六百文 阿部川

川札貳拾四枚分

壹枚ニ付六拾四文

廿三日

一 四百文 奥津川

川札拾貳枚壹枚ニ付

三拾貳文ツ、

同廿四日

一 貳ノ三百四拾八文 大井川

川札貳拾四枚分

壹枚ニ付九拾四文ツ、

同廿四日

一 八拾文 藤枝川

貳駄分

同廿五日

一 六百文 天龍川

但本馬貳足人足

賃錢

同

一 七百元 同船運賃

但本馬貳足分初度

同

一 八百元 同

右同断後度

天龍川では合計貳ノ三百文を要している。川越の難易によつて、川毎の賃錢にランクがあるようである。この賃錢も、インフレーションによつて値上りしており、酒匂川の場合、巳（明治二年）五月の受取寛では川札一枚百五十文ぐらいに上っているし、大井川の場合でも、卯（慶応三年）七月には川札一枚百二十一文、巳（明治二年）五月では二百七十文に上っている。これら賃錢の支払相手は、川問屋または川庄屋である。一例を上げる。

（資料六の2）

大井川

一五貫六百六拾五文 川札四拾六枚半

壹枚ニ付百貳拾壹文

右之通賃錢請取川札相渡申候以上

島田方庄屋

卯七月十三日

錢作



巳八月廿

馬入川

御伝馬所[㊤]

名主

久留米様

小川源右衛門様

七、東海道海上船賃錢

また、急御用の場合に、川留などで遅れたときには釈明のため証明書が必要としたようで、今日の国鉄駅の列車延着証明書に似たものを、川宿役人に発行してもらっている。次の資料がそれで、道中勘定帳（資料一の8）巳の八月廿四日東京出立分には、「馬入川留川ニ付藤沢宿逗留致ニ付茶代」として二朱を計上している。

（資料六の3）

覚

今般急御用ニ付御登り被遊今八月廿六日

巳上刻宿着被遊候処馬入川満水にて当月

廿五日午下刻通路無御座賃船留候

ニ付当宿御上宿被遊今月廿七日午上刻川明ニ付

御越立仕候此段御書付以奉申上候以上

藤枝宿

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

海上船旅は浜名湖新居―舞坂間一里と伊瀬湾宮（熱田）

―桑名間七里の二ヶ所である。前記川越賃錢所載資料（六の1）は船賃も記載している。

同（五月）廿六日

一 百七拾式文

舞坂船

但本馬式疋六人

同廿九日

一 百文

宮駅泊り是方

人足運賃

乗場迄

同廿九日

一 三百貳拾八文 宮駅船賃

但本馬壹疋ニ付

百六拾貳文つゝ

また次に示す受取覚によって、賃錢支払の相手方がわかると共に、賃錢が値上りしていった状況も明らかである。

(資料七の1)

覚

一五百五拾四文 借切船壹艘

右者從舞坂新居迄御定之

船賃錢慥ニ奉請取新居宿

水主え相渡申候已上

十月三日

舞坂宿

御用達

藤屋金右衛門



なおまた、別の藤屋の受取覚資料(七の2)によれば、賃錢は壹貳百四十九文となっており、また下り新居宿の

場合(資料七の3)も勿論同額壹貳百四十九文で、支払先は新居御用達筑後屋次郎右衛門とあり、筑後屋という屋号から推察するに、御用達は舞坂宿をふくめ、久留米藩常用だったと思はれる。なお、荷物人数により増水主を要求されたことも右の新居宿筑後屋の受取覚でわかる。

浜名湖渡の次の海上旅行は宮―桑名間である。

最初に掲げた資料(六の1)では本馬壹疋百六十二文であるが、次の資料(七の4)によれば、明治二年には壹駄ニ付貳百七十八文と値上りしている。また前の資料には欠けているが、人についても賃錢が要求されることが明らかである。

(資料七の4)

覚

一五百七拾文

乗下式駄

但壹駄ニ付貳百七十八文づゝ

一式貫五百廿四文 船中乗場代

但シ壹人ニ付壹貳百六十文づゝ

ノ三貫八拾四文

右者從桑名宿宮宿迄船賃錢ニ
奉受取候以上

桑名宿御用達

和泉屋九右衛門

㊦

また下り便熱田宿御用達大森仙右衛門の受取証（資料七の5）では、御合船御割合で八貫四百拾六文と値上りしている。

八、伏見三十石船賃錢

伏見―大坂常安橋間のいわゆる三十石船の賃錢支払先は、下り便は伏見越前屋庄兵衛で、受取覚は六枚（資料七の6、11）あるが、いずれも年不明だが、一人前賃錢は次の通り上昇している。

⑥ 壹	十八人前	一人前	五十五・五文
⑦ 壹	十二人前	〃	百廿五文
⑧ 七貫百文	二十四人前	〃	二百九十五・八文
⑨ 四貫八百文	十二人前	〃	四百文

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

⑩ 六貫三百七十二文	十五人前	〃	四百廿四・八文
⑪ 五貫九百五十文	十四人前	〃	四百廿五文

なおこの外、舟蒲團代も支払っている。

九、大阪―黒崎舟賃

これについては、船宿受取証はないが、道中勘定帳によれば明治二年（資料一の7および8）では一人一日二分二朱百文で、航海日数は8日から9日を要している。天候次第ではもっと日数を要したであろう。この他に、昼食、炭、ふとん代、茶代も必要であった。

十、旅 籠 代

旅籠代は、道中勘定帳では明治二年の前記二資料によれば、東海道で8泊もしくは9泊、一人一日一步又は一步一朱、また昼食代は二朱又は二朱二百文として、機械的に計算することになっているようである。しかし次に紹介する同じ年発行の宿屋の受取証によれば、一泊一人三朱ないし

三朱三百文である。ただし、昼弁当代は一人分壹朱四百文であるから、合計すれば一步四百文ないし一步七百文となつて、ほぼ等しくなる。その差額はおそらく、旅の疲れを癒す夜の一杯の酒で帳消しになったであらう。なおこの資料には、その酒・肴の記載があつて興味をひく。

(資料十の1)

覚

八日夜

一金壹歩二朱 御式人様

御壹人様ニ付金三朱づつ

一貳百四十八文 御酒代

九日夜

一金壹歩二朱

御壹人様ニ付金三朱づつ

(破損) 壹朱 玉子とじ

なべ

(途中破損)

右之通御旅籠代御中飯代共

御弘被下置槌ニ奉受取候以上

藤沢宿

巳二月九日

脇御本陣

上

柏屋半右衛門

(資料十の2)

覚

一金壹歩二朱ト 御式人様

六百元 旅籠料

但し御壹人様ニ付金三朱ト

三百文づつ

一金貳朱ト

同

八百元 弁当代

但し御壹人様ニ付金壹朱ト

四百分

金貳歩ト

金四百分

右之通御旅籠代御弁当代共槌奉受取申候以上

桑名宿

八月十日

和泉屋

九えもん ㊤

煮肴

黒いも

むまに

十一、料理代

江戸、大阪、京都逗留中の小遣イは、一人一日二百文（明治二年）となっているが、逗留中は慰労をかねて同僚達と宴を張ることもあった。料理屋の受取は四枚あるが、麻生上ノ町相模屋、残りは場所不明で海月楼、津田屋、和田である。和田の分は文久三年のものでメニューが詳しく、飛脚の飲食酒肴の程度がわかって面白い。

（資料十一の1）

覚

一 四百十六文 さけ壺升
一 貳百七十貳文 上 六合
一 七百八拾文 御取もの

なべ式

吸もの

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚

ノ 十ノ 四百七十貳文
右之通槌ニ受取申候以上

亥八月廿八日

御四人衆中様

和田

十二、書状、荷物の配達

托された書状、荷物は宛先へ納めて、初めて任務終了となる。届納めと共に受取証をもらったようである。次の資料（十一の1）はその一例である。和知半左衛門は、預り荷物控帳に所出の人物である。

（資料十二の1）

覚

一 油紙包御状箱 一箇
右之通槌ニ受取申候已上

十一月晦日 和知半左衛門

(資料十二の2)

(破レ) 元治々

□田隊

渡辺武吉

同組中え

金子入書状壱通

ノ

辻藤三郎々

辻友次郎え

金子入書状壱通

右者慥ニ受取申候以上

五月五日 今井彦四郎◎

(注一)

(注二) 今井彦四郎、拾人扶持竹之間並(文二)、貳百石御馬廻並(明二)

また、町人の書状、金子、荷物も取扱っており、金子は百両、五十両に及ぶこともある。次に示す資料(十二の3)

はその一例である。

(資料十二の3)

覚

一金百両也

右者古賀屋久七殿々

右之通慥ニ受取申候

辰七月十七日 山崎屋

甚右衛門

小川源右衛門様



この他、次の資料があつて、久留米、東京、大阪、京都相互の商取引をうかがう一助となる。

発送人

受取人

古賀屋久七々

菱屋孫兵衛(京都? 五条)

送人不明

大阪屋茂兵衛(江戸飯倉三丁目)

越前屋庄兵衛

藤屋仁兵衛(伏見京橋下油掛町)

送人不明

佐野屋庄兵衛(京都)

竹野屋治兵衛

萬屋茂兵衛(京都寺町通五条上ル)

二文字屋市右衛門 天満屋平兵衛（大坂）

同 豊後屋喜八（大坂土佐堀二丁目）

特に久留米商人筆屋太兵衛（通称筆太）関係の資料が五種ある。筆太の取引先は、大和屋三郎兵衛（東京通油町）、前記大阪屋茂兵衛（東京飯倉三丁目）、近江屋久兵衛（江戸）、山本屋吉兵衛（大坂）である。商いの内容は不詳だが、山本屋への送り荷物は象牙、根付である。また東京の大坂屋から、送り状によれば八貫から四貫の梱を送っており、大坂屋は久保半右衛門（同じく久留米藩飛脚）に代金を渡し入帳依頼をしている。全く同形式の送り状が御荷物預控の頂に所出の松本盛藏宛に出されているのも、筆太と松本の何らかの関係を想像させるに足る。

（終）

後記 本史料は、小生の曾祖父小川源右衛門喬久（文政八年生、明治三十五年没）居住の旧宅の襖の下張より発見したものである。明治の郵便新制度創出以前の史料として、何等かの参考になれば幸いである。

なお、同じく飛脚勤めをした者として、倉八平太、森崎茂作、山下勇治、久保半右衛門の名が見える。

幕末から明治初年にかけての久留米藩飛脚